



Title	人蚤の吸血活動について
Author(s)	藤崎, 一克
Citation	長崎大学風土病研究所業績 3. p.1034-1037, 1954
Issue Date	1954-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/4870">http://hdl.handle.net/10069/4870</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-22T08:59:51Z

# 人蚤の吸血活動について

長崎大学風土病研究所衛生動物学研究室（主任 大森南三郎教授）

藤 崎 一 克  
ふじ さき か よし

## 緒 言

人家内で人を襲う蚤類の種類及びその季節的消長に関しては、経験的な記述はあるが、科学的な調査の成績は殆んどないので、著者は昭和27年9月から、28年9月まで、猫を飼ひ、鼠族が普通に棲息している一農家の居室

で、蚤類の採集を行い、以下に述べるような成績を得たので報告する。この報告を出すに当り、御指導並びに御校閲を賜つた恩師大森教授に深謝し、文献の借用をうけた鳥取大学長花教授に謝意を表する。

## 採集方法と成績

採集場所は、佐賀県杵島郡江北町大字山口（33°12'N., 130°11'E.）で、筑紫平野に望む山脚地帯の畑に建っている古い農家である。この家は藁ぶきで、南北に六畳が二間あり、夫々の部家に一家族づゝ生活している。この内の南側の部屋で採集を行つたが、この部屋は天井はなく、代りに葦であんだ簾をおいてある。床下は粘土質で硬く排水は良い方であり、床まで約50㎝の高さがある。家畜は猫、鶏、兎が飼育してある。鼠は猫がいる間は殆んどいなかったが、猫が27年12月に死んでから、時々騒ぐようになった。鼠蚤を調査する目的で数回捕鼠器を用いたが鼠は採れなかつた。又猫でも数回蚤の採集を行つたが、採取出来なかつた。

このような状況のもとで、人蚤は多発していたが調査期間中は殺虫剤の撒布を禁じ、週一回宛主人が夜休む時毛布を裸で一番下に着て休み、朝静かに密閉出来る箱の中に毛布を入れ、クロロホルムで蚤を殺してから採集した。

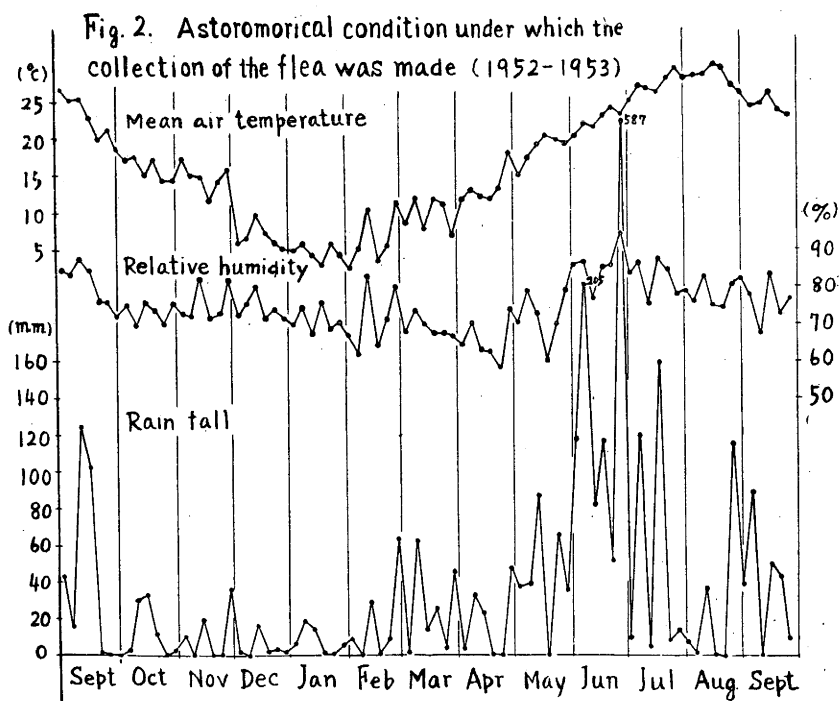
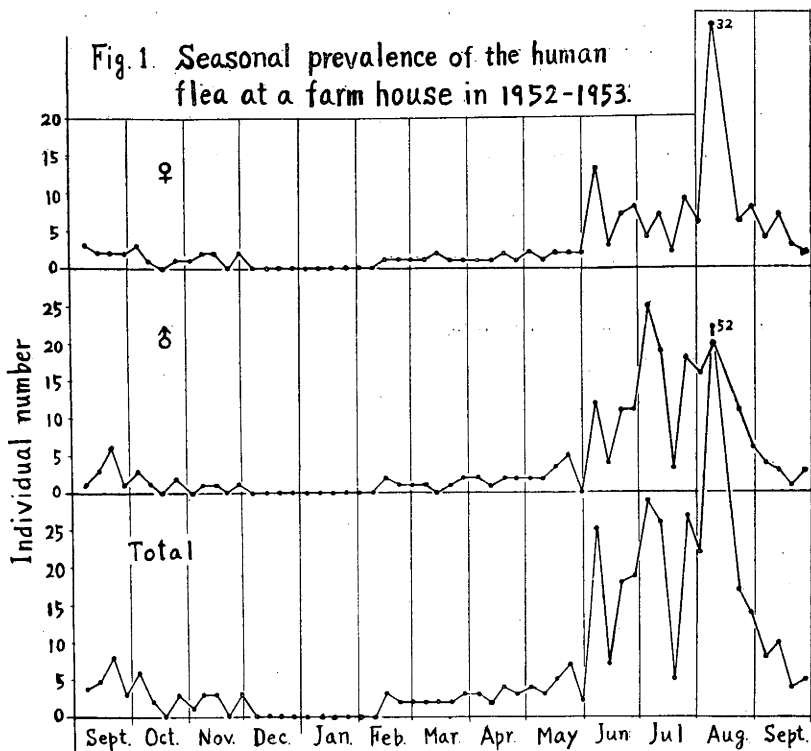
成績は第1表の通りで、全部ヒトノミ *Pulex*

*irritans* Linne, 1758 で ♀164, ♂214, 合計378個体であつた。ヒトノミ以外の蚤は全く採集出来なかつた。

Table 1. Number and Sex-ratio of human flea.

	Number	%
♀	164	43.4
♂	214	56.6
Total	378	

ヒトノミの季節的消長については第1図に示した通りで、27年9月に少し採集できたが、次第に少くなり、12月から翌年2月中旬までは全く採集できなかった。2月下旬から3、4、5月と僅かに増加の傾向にあり、6月になると急に増加し、8月に最も多く、9月に急に減少している。第2図は佐賀市に於ける温度、湿度、降水量であるが、これを参照すると、ヒトノミは高温多湿時に多く採集できていることが分る。



次にヒトノミの出現時刻を調査する目的で毛布2枚を用い、午後9時頃から午前2時頃まで1枚を着て休み、その後午前6時頃まで他の毛布を着て休み、夫々別の密閉出来る箱に入れて調査した成績は、第2表に示した通りで、午前2時を境にして、前期と

後期とに分けてみると、6回の中前期に多く採集できたのが1回、後期に多かつた時が3回、同数の時が2回で、採集総数では後期の方が多かつた。この結果からみると、ヒトノミは終夜入を襲っているものと云はねばならない。

Table 2. Number of human flea collected before and after 2 a. m..

Time	9 p. m. - 2 a. m.			2 a. m. - 6 a. m.		
Date	♀	♂	Total	♀	♂	Total
23/Aug.	3	3	6	3	8	11
30/Aug.	3	4	7	5	2	7
6/Sept.	1	1	2	3	3	6
13/Sept.	3	2	5	4	1	5
20/Sept.	1	0	1	2	1	3
27/Sept.	1	3	4	1	0	1
Total	12	13	25	18	15	33

### 考 察

人家に於ける蚤の採集成績は、多少の例外はあるが、南方の熱帯、亜熱帯に於てはネコノミ *Ctenocephalides felis* (Bauché, 1835) が優勢で、温帯や高地に行くに従つてヒトノミが多くなつていようである。著者の成績は、温帯での成績によく一致している。又季節的消長について見ると、春の終りから越冬蚤の羽化があつて、活動を始めるが夏期に多発し秋に次第に少くなるといはれている経験的事実をこの成績によつてよく証明すること

ができた。又この成績は、長花氏の岡山県に於ける1952年の成績と略々一致している。

性比について見ると、殆んど総ての文献に於て♀が多いと報告されているが、著者の成績では♀と♂の比が43.4:56.6で、明らかに♂が多くなつている。この事は興味あることであるが、原因については今の処不明で、或は採集方法によるのではないかと考へてゐる。

### 摘 要

1) 著者は昭和27年9月から、28年9月まで毎週1回、佐賀県杵島郡江北町大宇山口の一農家に於て、夜就眠時に裸体に白色毛布を密着させて休ませ、その毛布を翌朝密閉出来る箱に入れ、クロ、ホルムで蚤を殺して調査した結果、採集し得た蚤は全部ヒトノミ *Pu-*

*lex irritans* で、378個体、♀164、(43.4%) ♂214、(56.6%)であつた。

2) 季節的消長についてみると、♀、♂に依つて多少趣を異にするが、♀♂合計数をみると、9月には尙多少活動しているが次第に減少して、12月から2月中旬までは全く採れ

す、2月下旬から採れ始め、3、4、5月と僅かに増加の傾向があり、6月になつて急激に増加し、7、8月と更に増加して、8月に最も多くなり、9月に再び減少し始める。即ち高温多湿時に多く採集され、低温低湿時に少くなる傾向が見られる。

3) 人を襲う時刻については、午前2時を境にして前期と後期に分けて調査した結果から、ヒトノミは終夜人を襲っていることが窺

われる。

4) 性比を見ると、従来の多くの文献に現はれている成績とは反対に、♂が56.6%で多かつた。蚤の♀♂が元々略同数にいるものとする、今回の♂の捕殺率の高い事に対しては略1%の危険率で有意性が認められる。その原因については今の処不明であるが或は採集方法によるのかも分らない。

## 文

- 1) 藤崎一克：犬に寄生する蚤類について、長崎医学会誌。27(4): 285-288, 1952.
- 2) 小林晴治郎：寄生虫と衛生昆虫、白井書房。京都。1949.
- 3) 長花操：人家に於ける蚤類について、(印刷中)
- 4) 大森南三郎：台北市内で人類を襲ふ蚤類に就て、科学の台湾。3(5): 1-5, 1935.

## 献

- 5) 大森南三郎：台湾産蚤類に就いて、応用動物雑誌。8(3): 158-164, 1936.
- 6) Sapré, S.N.: Transmission of pasteurellosis by the flea. Indian J. vet. Sci. 15(2): 151-155, 1946. (cf. R. A. E., B, 38: 14, 1950)
- 7) Tremoley, H. L. & F. C. Bishopp: Distribution and host of some fleas of economic importance. J. Econ. Ent. 33(4): 701-703, 1940.

(昭29. 7. 15. 受付)